

関心を持つ

東京都 白百合学園高等学校 2年 西條 由香

「社会貢献」、この四文字を見たとき、自分たちとは、どこか遠く離れたような行為に感じてしまう人が多いのではないだろうか。実際に私もその一人であった。しかしどうだろう、社会に貢献するということは、直接的に利益に結びつき、その行為の結果が目に見える形となつて戻ってくることを言うのであろうか。私はそうは思えないのだ。

小学六年生の冬、学校生活においてのいざこざから、数ヶ月ほど登校することができなくなつてしまつた時期があつた。私は、地方の村に住んでいる祖母の「少し都会の喧騒を離れてこちらに来たらどうか」という提案に甘え、しばらくの間、長野県の小さな村で祖母と二人で過ごすことになつた。

村で過ごし始めて数日、毎日こたつでぼんやりしている私のあまりにも無気力なその姿を見て、祖母が私の手を引つ張つて散歩に連れ出した。小さい村だ、顔見知りではない私の姿を見かけた近所の人たちが口々に話しかけてくる。戸惑いながらも何とかその質問攻めをやりきつた私は疲れきつており、まだ元気に口を動かしている祖母を置いて家へと歩き出した。そのとき、私はある家の窓から小柄なおばあさんが、こちらを見ていることに気づいた。そのまま素通りするのは失礼だと思ひ、軽く会釈をして通り過ぎた。

一時間ほど経ちようやく家に帰つてきた祖母に、私はあのおばあさんのことを尋ねた。夫が数年

ほど前に亡くなり、今はずっと一人で暮らしているのだという。少し前の私なら、ただふんふんと話を流してしまっただろう。しかし村に来て、心細くどこか孤独感を感じていた私は、自分とおばあさんを重ね合わせてしまったのだ。そして、そのおばあさんに「関心を持った」。

次の日、私はあのおばあさんの家の前に立ち、窓のところを眺めていた。数十分ほど経ったときだろうか、おばあさんの顔がゆつと窓から現れた。自分で話す機会をつくりにいったにもかかわらず、「おはようございます！」と挨拶をするのが精一杯で、返事も聞かず、逃げるように走って帰ってきてしまった。

数日それを繰り返した後、これでは意味がないと自分を奮い立たせて、挨拶の後に自己紹介を試してみた。無表情な顔でそれを聞いていたおばあさんを見て、余計なことをしなければよかったという後悔の念が押し寄せてきた。しかし、自己紹介を終えたとき、おばあさんが私に向かって手招きしたのだ。正直、帰ってしまおうかとも考えたが、申し訳ないという罪悪感が私をおばあさんの家の中へと招き入れた。

おばあさんとこたつに入り、しばらくお互いに無言のときが続いたが、ぼつりぼつりとおばあさんが話し始めた。孫がないこと、今はずっと一人で特に趣味もなく家にこもっていること、そんなことを聞いた無責任な小学生の私は、おばあさんが一人で寂しいだろうと思い、毎日遊びに来ることを一方的に決めた。押し付けがましい約束をして満足した私は、スキップするように家に帰った。

次の日もまた次の日も、私は約束を守り続けた。だんだんとおばあさんとの会話も増えていった。しかしある日、呼び鈴を押してもおばあさんが出てこなかった。庭に回ってみると、はしごの近くでおばあさんが倒れているのが見えた。私は近くの家に走りこみ、すぐに救急車を呼んでもらった。

数日後、おばあさんが退院してきたことを聞くやいなや、私はおばあさんの家へと向かった。病院で手術を受けたことで、若干の後遺症は残ったものの、命は助かったおばあさんの姿を見て、ほつとして泣きながら抱きついたことを覚えている。

小学六年生であった私がした約束は、あまりにも無責任で、自分勝手なものであったかもしれない。しかし、私がおばあさんに「関心を持った」ことで、おばあさんの命が助かったといっても過言ではないと思う。他人に「関心を持つ」ということは、自分を相手のもとへと引き寄せなければならず、自分も相手も傷つってしまう危険さもある。しかし「関心を持つ」ことでしか、物事はよい方向へと動き出さないとと思うのだ。例えば、世界をよい方向へ動かしたいという大きな望みを叶えるにしても、まずは世界で何が起きているか「関心を持つ」ことから始まるのだ。もちろん、そのような大きな目標がなくてもいい。電車で席を譲るにしても、目の前に立っている一人の人に「関心を持ち」、相手のことを思いやらなければ始まらない。

私たちにとって、まずは自分の周り何が起きているかあらゆることに「関心を持ち」、そして自分の行動の意味を考えていくことが、社会貢献の第一歩である、と言えるのではないだろうか。 